

「水土を守る人々」では、農業や農業用水の役割とこれらが持つ多面的機能等が十全に発揮されていくために、農業水利施設等の維持管理を支える人々の日常にスポットを当てて、その取り組みを紹介することで、農業農村整備や多面的機能の発揮が「人」の支えの上に成り立っていることを伝えていきます。

「農家の声に応える用水管理を目指して」

～両総土地改良区東金出張所 事業係長 岡本秀寿 氏～

千葉県

1. 8,000haを超える農地の水利調整の担当責任者

今回「水土を守る人々」で紹介するのは、千葉県の東北部から九十九里平野に広がる1万7千haの農地に利根川の水を供給する両総用水、これを守っているのが水土里ネット両総（両総土地改良区）である。

そして両総用水で受益地域の約半分を統括している東金出張所に勤務する事業係長・岡本秀寿さんにスポットを当てる。



岡本さんは、東金出張所に勤務して5年目、事業係長としては3年目となる。担当業務は、担当区域に掛かる揚水機場、パイプライン、分土工などの運転や管理はもちろん、農家からの要請を受けて水利調整を行っている。時には基盤整備促進事業などの団体営事業で水路補修業務なども行うマルチな方だ。

岡本さんは、土地改良区に入ってから18年目になる。元々は事務職で入っているものの、今では技術的業務も兼務しており、職場ではベテランの域に入っているそう。「民間からの転職で採用されたんですが、最初は右も左もわからず、特別な技術を持っているわけでもないから、慣れるまでは大変でした。」と語る。

2. 配水管理における苦労

農繁期に入り送水時期になると緊張するのは毎年のことだ。「入って直ぐに『第

『1 揚水機場』で24時間 2 交代勤務で365日間の送水業務に 5 年ほど携わった後、末端に近い本納出張所へ配置転換となり、農家と直接水のやりとりをする現場に配属されました。そこで今の事務局長に指導を受けながら、土地改良区の仕事のイロハ、農家とのやりとり、水配分などの水利調整などをたたき込まれ、今のよう



水利調整して送水する水は、雨が無ければ、送水してくれと矢のような催促があり、急な雨が来れば、送水停止の操作を頼まれるなど、農家からの要望で毎日のように変わるそうで、これには最初は慣れなかったという。

水配分の要請は、末端を管理する水利組合から支線を管理する管理委員長を経由し、上がってくる仕組みになっている。これを岡本さんが管内の揚水量を決められた範囲に収まるように、また必要に応じて番水をするなど全体の水配分を決めているそうだ。担当範囲が広く、配水管理は大変なことも多いが、その分やりがいも感じているそうだ。

3. 農家との対話

かんがい期、非かんがい期に係わらず農家への対応はたくさんある。かんがい期は現場に呼び出されて、水の配分などの苦情を聞くこと方が多く、非かんがい期は、農家が土地改良区の事務所へいろいろな相談に訪れる。ほ場の排水改良、農地周りの水路等の改修など土地改良区本来の仕事から市町や県の仕事に係わるものまで区別無く持ち込まれる。「農業用水のことなら先ずは改良区に聞けばわかるだろう」との信頼感があるからこそ、その信頼感を裏切らないように心がけているそうだ。



4. 職場の皆さん

上司の子安事務局長は、岡本さんに全幅の信頼をおいている。「岡本君は、頑張ってくれてますね。全面的に信頼してますよ。私から見れば土地改良区の中では若手ですが、将来は改良区をしょってたってもらいたいですね。彼が持ついつの

間にか人の懐に入り込める感覚はすごいものがあるし、そのために地域のことや農家についていつも勉強していますよ。」と語る。

5. 終わりに

岡本さんに仕事についての信念を聞いてみた。「農家の目線で仕事をしていくことが最も重要だと思ってます。誰かがやるのでは無く、自分がやることを心がけています。これからもその気持ちを忘れずに取り組んでいきたい。技術者ではないので、お願いしないとできないこともたくさんあるので、先ずは自分ができることをきちんとやっていきたい。」とにこやかに微笑みながらも、力強く話してくれた。



土地改良区の仕事は、農業水利施設がきちんと使えるように日々点検し、必要に応じて補修するなど、地味で目立たないが、農業用水を使うためには無くてはならない仕事だ。そして岡本さんみたいに、実直に、施設の維持管理に取り

組む人がいるからこそ、農業用水が農地に送られコメや様々な農産物を生産することができるのだ。

<参考：両総土地改良区>

※詳しくは両総土地改良区WEBページを参照 → <http://www.ryoso-lid.or.jp/>

【農村振興局整備部設計課】